



ヨット乗りたちが 島の窮状に立ち上がる

宮城県石巻市 特定非営利活動法人ひよっこりひょうたん田代島





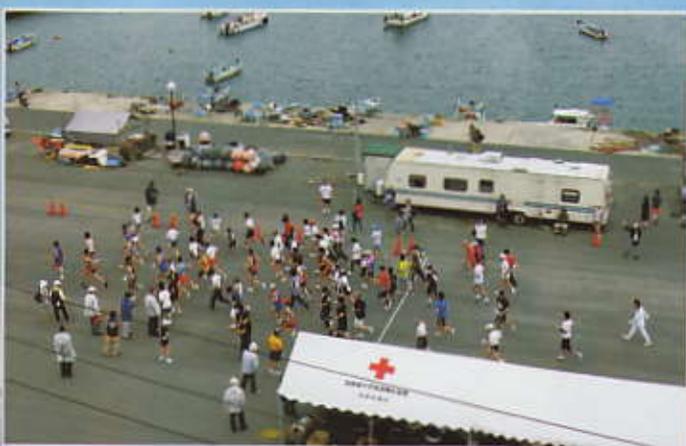
「ひよっこりひよたん田代島マラソン大会」というちよつと変わった名前のイベントが、石巻港の沖合い十七キロにある田代島で開催された。企画・運営しているのは、NPO法人ひよっこりひよたん田代島（理事長・小川勉さん）。今回が四回目で、同会のメインイベントだ。前日メンバーたちはそれぞれのヨットで田代島に向かった。

水や食糧の補給基地として田代島を利用していたヨット仲間たちが、高齢化・過疎化で元気のなくなっていく島をなんとかしようと結成したのが同会。

「猫の島」と言われるほど田代島には猫がいる。昔から大漁を招く縁起物として大切にしてきた、漁師の島。周囲十一・五キロ、ひよたん型の島であることから会の名前をとった。

そんな田代島は、今超高齢化、過疎化に見舞われている。島民の平均年齢は七十歳を優に超え、昭和四十年代には千人を超えていた島民も、現在百人に満たない。小・中学校は平成元年に閉校し、若い世代の島離れは一層進んだ。

この窮状に、島を愛するヨット乗りたちが立ち上がった。その一つが、このマラソン大会。



メンバーたちは会場設営や島内を巡りコース表示の設置、路面の清掃をし、参加賞の袋詰めを精を出す。「道路の掃除をしてくるから」と切り出した木を帚代わりに軽トラのお尻に結び付けて出発する日下啓一さん。日下さんは唯一の島内居住のメンバーで、民宿のご主人。いわば同会と島の「もやい」といったところ。他には、ヨット界では知る人ぞ知るといふ人もいれば、某有名ホテルの元コックさんなど、職種や年齢も様々。共通点はヨットを海をそして田代島をこよなく愛しているということだ。小さな島に元氣を持ち込もうという同会のメンバーだけに、準備万端で迎えた「前夜祭」は、夜遅くまで続いた…。

大会当日は心配された天気もどうか持ち堪え、臨時便も増発された巡航船から参加者がぞくぞくと降りてくる。石巻市内はもとより、東北各県や新潟、埼玉、千葉、神奈川、遠くは福岡から参加。種目は六キロコース、十キロコース、ウォーキング六キロ。五歳から八十歳までの約二百四十名が、あるいはタイムを競い、あるいは島の自然を楽しむ。

島内を巡るコースは起伏の激しい難コース。「あらかじめクロスカントリーみ



たいと教えてくれれば…」という嘆き節も出るほど。一方ではおおらかさもある。例えば、距離測定は標識などを設置するときに車で計測している。そのため少々の「誤差」が出る。六キロは実際には六・七キロ、十キロは九・八キロと出発前に発表があり、参加者から笑いがこぼれる一幕もご愛嬌。むしろ、角突き合わせる世界から離れて、島の自然を満喫しながら、島の風土に触れながら、島を感じてほしい、楽しんでほしい。そんな島の豊かな自然を活かしたマラソン大会だ。

いわば「よそ者」によるマラソン大会だが、もちろん島民の協力は欠かせない。当日は安全面を考慮して島の自動車は動かさないという誓約書を島民からもらっているし、島の漁師夫婦が参加者に海鮮汁を振る舞ってくれる。完走後の疲れた体に島民の温かいもてなしが嬉しい。

今回は、終了後の写真コンテストも企画した。田代島を感じる写真を撮影してもらい、島の魅力を発信しようという、参加者、応援団、見学者、島民、スタッフの全員参加による写真コンテストだ。

これまでも、島を紹介するマップ作り、ホームページの立ち上げ、刺し網やカゴ漁などの漁業体験の受け入れ窓口(県



の事業)を担ったり、毎年夏にはマリンス
 ポーツキャンプなど、よそ者による島の魅
 力のアピールは様々だ。

メンバーの一人が前夜祭で言っていた。
 「ヨット乗りが陸でマラソン大会をやるん
 だから、おかしいでしょ。でも、十年後
 に無人島になってしまいかもしれない、こ
 の島を盛り上げたいんだよ」。

メンバー全員の田代島を愛する気持ちを
 代弁する一言であり、その結実がこのマラ
 ソン大会だったのではないか。

■連絡先 〒九八六〇〇三三
 宮城県石巻市大字田代浜字仁斗田三八
 TEL 〇二二五一一四二二二
 (ぶちりゾートマリライフ)

